

景気動向指数研究会 議事概要

1. 日時：平成22年6月7日（月）13：30～14：20

2. 場所：共用第4特別会議室（中央合同庁舎第4号館）

3. 出席者：

（委員）

吉川 洋座長、刈屋武昭委員、小峰隆夫委員、嶋中雄二委員、櫛 浩一委員、
福田慎一委員、美添泰人委員

（事務局）

岩田一政経済社会総合研究所長、中藤 泉経済社会総合研究所次長、
私市光生総括政策研究官、杉原 茂景気統計部長

4. 主要課題：

- （1）第14循環の谷の暫定設定について
- （2）その他

5. 議事進行：

○ 開会

事務局より、論点メモ（資料1）と参考図表集（資料2）に基づき、第14循環の谷の暫定設定について説明があり、その後、意見交換を行った。

主な意見・議論は以下の通り。

○ 第14循環の谷の暫定設定について

- ・波及度、量的な変化、景気拡張の期間の3つの原則を十分に満たしており、合わせて日銀・短観やGDPなどの参考指標も検討されており、2009年3月を暫定の谷とすることで異論ないといった意見があった。その結果、研究会として、全員一致で第14循環の景気の谷を2009年3月に暫定設定することとした。

以上の意見を踏まえて、内閣府として、第14循環の景気の谷については、2009（平成21）年3月と暫定的に設定することとした。

○今後の検討課題について

- ・CI作成の際に行われる刈り込み処理が、個々の系列に外れ値が出た場合を想定しており、リーマン・ショック後のように全系列で外れ値が出た場合は、刈り込みをしない方

が景気の実感と合うとの意見があった。

- ・ C I の推計において刈り込みを行うこと自体は適切である。ただし、現行方法では時系列で刈り込みを行っており、本来は同時点で空間的に刈り込むべきとの意見があった。
- ・ C I の水準を見たとき、結果として、リーマン・ショック後は大きく刈り込みされたのに比べて、谷以降は刈り込みされていないことにより、第 14 循環の景気後退が過小評価される一方、谷後の景気拡張が相対的に大きく評価されるなど、水準の回復の程度が問題との指摘があった。
- ・ C I の水準としては景気の実感とは合わないものの、C I の変化方向としては合っているとの意見があった。
- ・ 刈り込みなしの数値も参考として公表してほしいとの意見があった。

- ・ C I における刈り込み処理を行う際、主観的な判断が入らないよう機械的に処理する方が良いとの意見がある一方、異常な経済の動きかどうかを判断して刈り込むかどうかを決定した方が望ましいとの意見があった。
- ・ 景気動向指数の計測は普遍的な方法で計算することが望ましいことから、リーマン・ショックのような個別的な経験から、すぐさま刈り込みなし C I を採用しないと結論付けられない方が良いとの意見があった。また、地震や制度変更など、刈り込みを必要とする場合もあるとの意見があった。
- ・ 刈り込み処理の考え方も様々あることから、C I の計測方法を含め、第 14 循環の山谷を確定する研究会の検討課題とした方が良いとの意見があった。

- ・ 今循環の山谷の設定については HD I に基づいて行うが、今後も引き続き HD I を中心に行うのか、それとも別の方法で山谷を設定するかについても議論した方が良いとの意見があった。
- ・ これに対して、景気の子谷は、本来、拡張と収縮の 2 局面を分かつ転換点なので、引き続き D I の考え方で設定するべきだとの意見があった。
- ・ 現在、D I を計測するのに望ましい指標を使って C I も計測していることから、採用系列の見直しを行った方が良いとの意見があった。

今回の景気の子谷については刈り込み処理による影響はないことを確認した上で、以上の意見を踏まえ、C I における刈り込み手法の見直し、C I の作成に望ましい採用系列への見直し、HD I を含めた景気基準日付の決定方法について、第 14 循環の山谷を確定する際に議論すべきとされた。

○ 閉会

※ なお、本議事概要は速報版のため、事後修正の可能性があります。